

平成 26 年度中学校武道授業(合気道)指導法研究事業



授業で実際に使用している紐を用いての実証（右端＝齊藤研究者）

本年で6回目となる平成26年度の合気道指導法研究事業【主催＝（公財）日本武道館、（公財）合気会、日本武道協議会、後援＝文部科学省】が日本武道館本館大会議室、第一小道場において平成27年2月14日・15日の2日間の日程で実施された。

□初日（14日）

大会議室において行われた開講式では、栗林孝典合気会渉外課長より、「安全で有意義な授業となるよう、中学3学年の指導要領を盛り込んだ『指導の手引』の内容精査や、採用校への聞き取り調査をもとに、現場での問題点や注意事項を具体的に洗い出していきたい」との挨拶があり、続いて三藤芳生日本武道館理事・事務局長より「武道振興大会決議文に謳われているとおり、複数種目の

実施が課題となっている。日本武道館と共催で行っている少年錬成大会や指導者研修会を拝見しても合気道は熱気が感じられる。研究事業との連携をし、合気道が益々普及されることを願います」との挨拶があった。

さっそく研究協議に入り、外部指導者導入についての話し合いがなされた。合気道は現在全国で約40校が授業で採用している。地域で見ると、和歌山県田辺市、茨城県笠間市、京都府綾部市、東京都新宿区などと、合気道開祖植芝盛平翁生誕の地であることや学校が合気会本部道場の近くにあることなど、「地域の実態に応じた」採用が多いのが特徴的である。事例研究では、授業に取り入れるにあたって指導する教員自らが「導入にあたり、他県の視察を行った」「学校長とともに、合気道道場に通り自ら体験、稽古した」など導入



DVD 内容確認

時の苦心が窺える。また、導入の動機として、「何の運動経験のない女子生徒が安心して、安全な形として指導できる。襟を掴むことがないので、ジャージとマットがあればできる簡易性、礼に始まり礼に終わる精神、相手を思いやる心、女子教育、人間教育としてとても大切なものを内包している」と、安全、簡易性、女子にも導入しやすいなどが挙げられている。

とは言うものの、受け身、関節技法など、合気道にも危険な技があることも事実である。

授業開始の2時間程度は体育教員のみで、合気道の心得、礼儀作法（座り方、立ち方、礼法）、構えなどを行い、実技の授業では外部指導者が指導にあたる事例が多い。「道着と袴姿での指導は、生徒にとって本物の合気道を生で見ることができ、楽しさの中にも緊張感のある授業ができていく」と概ね好評である。との報告がなされた。

また、現在制作中のDVDの内容などについて討議が行われた。

□2日目（15日）

場所を大会議室よりB2第一小道場に移し、実技を中心に研究が行われた。

齊藤あやめ研究者（羽村特別支援学校）が実際に授業で行っている補助器具を用いての指導法である。なお、齊藤研究者は授業開始時は全くの初心者であったが、現在は初段を獲得した有段者である。補助器具は、同研究者が自らも初心者であったことから、いかに初心者に合気道を理解させるか工夫された器具となっている。

角落しでは、最初に単独でバランスを崩し、どのようにしたら倒れるのかを体感する。次に相対となり、お互いが紐を持ち、片方が引っ張ることで崩れを安全に体感する。最後に相手の腕を取り隅落しをかける。と段階を踏んだ指導法が紹介された。また紐を四角形にして畳に置き、手を着く



位置を確認するなど、その場で見てわかる方法も紹介された。

午後は会議室に戻り、本研究協議内容をどう指導者研修会へ反映させるか、また指導者研修会の具体的な内容について提案や意見、情報交換が行われた。

閉講式では金澤威合気会指導部師範が挨拶に立ち、「実りある研究協議ができたと思う。共催された日本武道館にお礼申し上げる。本事業は、合気道を教材化しどう授業に取り入れるかの研究である。多くの合気道指導者にもこのことをよく理解願ひ、協力していただきたい。そのことが合気道全体の普及振興につながると考えている」と締めくくった。



◇研究者

立木幸敏 国際武道大学教授
 金澤 威 合気会指導部師範
 鈴木俊雄 合気会指導部指導員
 日野皓正 合気会指導部指導員
 齊藤あやめ 都立羽村特別支援学校教諭

◇合気会

栗林孝典 合気会総務部渉外課長
 藤本光海 合気会総務部

◇日本武道館

永嶋信哉 振興課長
 端 春彦 振興課主任